

# Tamanga Ran! Vol.5 2016.8.16

青年海外協力隊 マラウイ派遣 本田 藍

こんにちは、前号からだいぶ時間が空き、久しぶりのニュースレターとなってしまいました。昨年の7月7日にマラウイに赴任してから1年1か月が経過し、活動も折り返しとなりました。7月中旬で学校もちょうど1年が終わり、現在は夏休みを楽しみつつ、1年の活動の振り返り、来年度に向けての活動の計画を立てているところです。私の任地ムチンジはこの2か月くらいとても寒く、気温が約10℃まで下がることもあり、毎日ダウンがかかせませんでした。この話を家族や友人にするとアフリカが寒いなんて信じられないと毎回言われますが、時には寒すぎて家の中で七輪を焚いて暖をとっていました。ここ1,2週間でようやく少しずつ暖かくなってきて、色々と活動しやすく（虫の動きも活発に）なってきました！



\*巡回校で馬跳びを教えた時の様子

## ◎活動の振り返り

この半年間を通して、担当ゾーン内にある15校のうち3校を巡回し、週に1度出張授業のような形で表現芸術（日本の情操教育）に関する授業を行ってきました。内容は日本紹介、日本語指導から始まり、リズムや音符の指導、馬跳びやリレーなど、音楽と体育の実技が中心です。マラウイでは、1人の教員に対して100人を超える多すぎる生徒数、教材・教員の経験不足等の理由から、情操教育で実技を行わず、セオリーだけを指導する方法が一般的になっています。例えばこんな具合です。「サッカーは11人で1つのボールを使い競技するスポーツで、そのうち1人はゴールキーパーです……。スポーツには個人スポーツとチームスポーツがあり、これはチームスポーツです。それではチームスポーツをするうえで重要なことを話し合ってみましょう。」実技をせずにチームワークが学べるでしょうか!?実践を通して知識を学び、

\*一番お世話になったメイン校のStd.6のクラスで集合写真



友達と一緒に体を動かし楽しむことで協調性を学ぶ、教員に対しても同じで、これが私の活動の中で伝えたいものでした。

活動していて面白かったことは、生徒の純粋さと積極性です。「今日はこれをやります」と新しいものを見せただけで「Yay!!!!」と大声をあげて拍手したりジャンプしたりし、デモンストレーションを頼むと「Me!Me!Me!」と初めてのことでも前のめりに手を挙げてきます。基本的にみんな目立ちたがりです(笑) 逆に苦労したことは、クラスマネジメントで、普段なかなか教室から移動して授業をすることのない生徒たちはグラウンドで授業をするといっただけで大喜び。移動して静かになるまでに10分かかりました。「10人ずつのグループを作りなさい」という指示にも均等にグループを作れない。私が10人数えて座らせ次のグループを数えだすと、そこにどんどん移動してくる生徒。途中でグラウンドの端に逃げ、おしゃべりしている生徒。いざスタートしても、6グループでスタートしたリレーが、途中でグループが崩壊しゴールしたのは3グループ。馬跳びにしても、チームで列を作って飛ぶはずが、自分の番が待てず隣の列を飛びはじめる生徒。ちなみに私が指導していたのは6,7年生が中心で、年齢は12-17歳です。グループになること、真つすぐ列を作ること、静かに人の話を最後まで聞くこと、日本では当たり前に行われていることが、改めて子どものときからの積み重ねでできるようになることを学び、同時に時間をかけて忍耐強く指導していかなければいけない課題だと感じました。



\*発表前に衣装のはっぴを着て集合写真

## ◎マラウイの学校でソーラン節

授業以外で何か日本のことを知ってもらったり、子どもに新しい体験をさせてあげたりできないかなー、ということで、教科書の単元の1つである“伝統ダンス”として日本の南中ソーラン節をメイン校で7年生の希望者に教えました。はじめに終業式で発表する旨を伝え、きちんと毎回責任をもって練習に参加できる人のみ集まりなさいというアナウンスを英語だけで行い、別の日に登録日を設けました。興味本位で大勢が集まり、混乱が起こることを避けるためです。レジスターの日、正しく情報がくみ取れ、やる気のある約30人が集まりました。全員で話し合いをし、練習日時を決め、もう一度時練習時間を守ることを、極力休まないこと、全員で協力することを、確認しました。

いざ練習を始めると、時間通りにくる子、来たり来なかったり気まぐれな子、光るセンスのある子、毎回休まず一生懸命練習する子、上手だけど少しふて腐れた感じの子、様々いて日本と同じだなーと思いました！全員で協力して1つのものを作る達成感や協調性を学んでほしいと考え、個人主義のマラウイではなかなか行われることのないグループワークも練習に取り入れましたが、結果はんー……。協力する姿がなかなかみられず、イメージ通りには進まないことが多かったです。しかしさすがポテンシャルが高いのか、みんな基本的に覚えが早いように感じました。

そして本番当日、4000人を超える全校生徒の前で踊るといことで、さすがに普段おちゃらけた彼らも緊張していました。しかし教員や周りの生徒たちからの評価はとて高く、「なんで私を誘ってくれなかったのよ！」「今まで見た中で一番いいダンスだった！」と言う声もあがり、生徒自身もとても楽しめ、かつ練習の成果を人前で発表する良い経験になったのではないかと感じました。

## ◎公務員もサイドビジネス!?

～お金になるマンダシ～

マラウイでは、いたるところでマンダシと呼ばれる小さな揚げパンをバケツ一杯に入れて売り歩いている人を見かけます。道を歩いてもバスに乗っていても、1個50-100MK(Malawi Kwacha)のマンダシを売りに来ます。私の働く学校では、先生たちがマンダシやフリーズス(ジュースを凍らせたアイス)などのスナックを休み時間に生徒たちに売っています。子どももお金を持ってきて休み時間にそれらを食べるのが1つの楽しみです。はじめの頃こそこの光景に違和感を覚え、教育上どうなのか…と考えたものですが、1年経った今では一概に否定もできないな、と思います。その理由について。

マラウイの小学校教員の初任給は、55,000MK。5-10年程のキャリアの中堅教員で約75,000MK。これにプラスで街の中心から離れた村の学校に勤務している教員は“Rural Allowance”として10,000MKもらっています。ある日、仲の良い先生がマンダシを持ってきていたので詳しく聞いてみました。(ここは手当のない学校)



\*マラウイの伝統ダンス“Ingoma”を踊るメイン校の生徒

私「毎朝これ自分で作ってきてるの？」

先生N「朝4時起きで1日100個作ってるのよ」

私「えー、朝作ってるの!?大変じゃないの？」

N「もう慣れたから大丈夫、それに私はRural Allowanceがないから、その分これでお金稼がないとお給料だけじゃ足りないの。40MK/個×100個=4000MK/日、4000MK×5日=20,000MK/週、20,000MK×4週=80,000MK/月……月80,000MKよ！」

私「お給料より高いじゃない!!」

N「そうなの、いいビジネスでしょ？」

私「(確かにいいビジネスだけど…。お給料が低すぎるのか、でも教員は他の公務員よりもお給料は高いはず。マンダシビジネスが良すぎるのか…そりゃみんなまじめに仕事しないで道端でマンダシ売るよなー……)」

と腑に落ちたような落ちないような気持ちになりました。

## ◎らんのつぶやき

協力隊としての活動も折り返し、ということで、この1年間の自分の変化を振り返ってみたいと思います！

### →変化したこと→

- ・ 貧困・発展・平和についてよく考えるようになる
- ・ 日本・日本人の素晴らしさを実感するようになる
- ・ 時間にルーズになる（マラウィタイムに順応）
- ・ マラウィアンによく怒るようになる
- ・ 英語がマラウィ訛りになる
- ・ チェワ語で簡単な会話ができるようになる
- ・ 七輪（炭）にマッチ1本で火をつけられるようになる
- ・ バケツ一杯でシャワーを浴びられるようになる
- ・ 水の大切さがわかるようになる（停電より断水のほうが辛い）
- ・ 暑いのでよく炭酸を飲むようになる
- ・ ミニバス等、長時間待たされることに慣れる
- ・ 何事にも大雑把（寛大）になる
- ・ 「日本が見たい、俺を日本に連れて行ってくれ！」と言ってくるマラウィアンをかわせるようになる
- ・ 毎日の自炊で料理のレパートリーが広がる
- ・ 早寝早起きになる（早いと9時半就寝）
- ・ 100人以上の子どもの前に立つことに慣れる
- ・ マラウィのローカル料理を作れるようになる
- ・ 他のアフリカの国に旅行に行き、マラウィが最貧国だということを再認識する
- ・ スマホやネットを使う頻度が週2、3回に減る



\*South Luangwa の野生動物

### ←変化しないこと←

- ・ 値段交渉が嫌い（タクシーなどでいくら？と聞くと、よく How much can you pay? と返される）
- ・ 人を信用しすぎてよく騙される（特に金銭面）
- ・ 連絡なしに待たされるのが嫌い（毎日のように起きる）
- ・ 街中で“チャンチュン”と中国人を小ばかにした呼び方をされることにイライラする
- ・ 鳥が嫌いなためいたるところに野放しになっている食用の鶏が怖い
- ・ よく赤ちゃんに泣かれる（白人が怖いため）
- ・ マラウィの人はバイクのことを“Honda”と呼ぶので、自己紹介すると必ず名字で覚えられる
- ・ 遠慮なしに家に上がってくるマラウィアンに慣れない（これがマラウィの文化）
- ・ “ローカルフード”シマ”はあまり好きではないので誘われた時しか食べない



\*Zambia の South Luangwa National Park (サファリ) の空



\*マラウィ湖沿いの同期隊員の任地のお土産屋さんのお兄ちゃん